生活・実践・研究のあいだをただよう

―もがき・ひらき・えがく営み―

南 摩周
任意団体 yoriai.
mashu0minami00@gmail.com

Traveling Between Life, Practice, and Research : The Activity of Struggling, Opening and Describing

MINAMI Mashu
Private Organization yoriai.

Keywords: "A Traveler Between Boundaries", "Vague Unease", Autoethnography, Responsibility

要旨

本稿では,「何かを抱える生活者」,「実践者」,「研究者」という 3 つの立場を持ち，それらを往来しながら「あいだをただようひと」として活動する筆者の実践を報告するとともに,「あいだをただようひと」の実践の意義を探索する.

筆者は曖昧な心身の不調である「何か」を抱えており，それは「生きづらさ」や「病い」などの既存の言葉とは絶妙に定義が異なることから,「しんどさ」と呼ぶことにした.「生活者」として「しんどさ」を抱えながら，もがいた経験を踏まえて，筆者は実践や研究において,「しんどさ」をコア・テーマとして扱うことになった.

実践においては,「生活者」としての「もがき」の経験をワークショップ「きもち翻訳」や「みんなとつむぐ音楽会」などの活動へと発展させ，他者へとひらいていった．実践を行ううえで,「生活者」としての自分と「実践者」としての自分を切り離さず，あえて両方の立場を往来する在り方を重視している.

研究においては，不可視化されてきた「しんどさ」やそれを抱える人びとを「描く」ことを目的とし，修士論文の執筆に取り組んだ.「生活者」・「実践者」としての自分も研究に織り込めるよう,「多元的オートエスノグラフィー」という手法を用いた.

筆者は「あいだをただようひと」ならではの responsibility があるとし，ともすれば中途半端であると批判されてしまう，3 つの立場を往来する在り方を肯定する.「あいだをただようひと」の responsibility とは，丁寧に「存在の認定」（緒方・辻 2020: 309）をする姿勢にある.「生活者」として自分自身も他者から認定，つまり,受けとめられていることを忘れずに，実践や研究を通して，他者の存在を受けとめる．このような相互的な「存在の認

定」を丁寧にしていくからこそ,「あいだをただようひと」という在り方に意義が生まれる．筆者は，今後も「あいだをただようひと」として，3 つの立場の濃淡を変えつつも，このresponsibility を拠り所とし，活動を模索していく．

１　はじめに

自己紹介をするとき,「あいだをただようひと」というキャッチコピーで自分を説明する．名刺にも，そのように書いてある．私は「何かを抱える生活者」「実践者」「研究者」という 3 つの立場を往来しながら活動している．どれも「〇〇者」と名乗ると，その立場を確立しているようなニュアンスを含んでいて, 正直決まりが悪い. 私はどの立場においても，中途半端だったり，発展途上であったりするからだ．しかし，本稿では 3 つの立場を往来するというイメージをわかりやすく描くために,「〇〇者」と仮に名乗ることをお許しいただきたい.

簡単に 3 つの立場について説明してから，本論に入りたい．1 つ目の「何かを抱える生活者」とは，心身の不調を引き起こす「何か」の経験を持ち,「何か」と共存しながら生活している者という立場である．いつから「何か」を抱えているのかは明確ではないが，この立場に自覚的になったのは，身体に症状が出るようになった 2011 年の 16 歳の頃からである.

2 つ目の「実践者」は，自身と同じように「何か」を抱える人と共に，表現活動の場をひらく者という立場である．2022 年から「実践者」としての活動を始めた.

3 つ目の「研究者」は，研究に携わる者という立場である．2022 年に企業勤めから大学院の修士課程へと戻ったことを機に，研究に携わることになった．半年前まで修士課程に所属していたが，修了後に実践・研究グループ「任意団体 yoriai.」[1)]を立ち上げ，共同代表として実践・研究活動を行っている．yoriai.での実践・研究と並行して，今後は博士課程への進学も視野に入れている.

私は，3 つの立場を段階的に得て，それぞれの立場の濃淡を変えながら往来してきた．本稿では,「あいだをただようひと」の活動報告を通して，3 つの立場のあいだをただよう活動を描くとともに, あいだをただよいながら営む「研究」はどのようなものであるのか, 紹介していきたい.

２　生活者の「もがき」から見つかるコア・テーマ

先ほどから使っている「何かを抱える生活者」という言葉は，歯切れが悪いと感じておられる方もいるだろう．しかし，この歯切れの悪さが,「あいだをただようひと」の活動におけるコア・テーマの発見に大きく役立っている.

「当事者」という言葉を使えば，歯切れの悪さは払拭できるかもしれないが，その言葉によって周縁化されてしまう部分に光を当てたい.「当事者」の定義は，中西正司・上野千

鶴子によると「ニーズの主体」と説明できる．何か「欠乏や不足」（中西・上野 2003: 3）があると自覚し，それらに対するニーズを持つ主体のことを指す（中西・上野 2003）．この定義に則れば，何が欠けているかわからず，明確なニーズもわからないが，心身に不調を感じる人は「当事者」からは周縁化されてしまう．「当事者」から周縁化された人びとは，欠乏ともニーズとも言えない「何か」を抱えながら，生活している．だからこそ「何かを抱えた生活者」という表現になる．私自身，どの「当事者」にもなりきれず，ただただ「何か」を抱えながら生活するしかない日々が長かった．

「何か」とは何なのか．それは生活に潜む，言葉にできない「モヤモヤ」である．私の場合は，この「何か」が蓄積すると，身体が硬直したり，勝手に動いたり，倦怠感に襲われたり，日常生活に支障をきたす．とはいえ，「何か」が何なのかをうまく説明できないのが悩みであった．

言葉にはならないが，心身に不具合を引き起こす「何か」は私だけに感じられているものではない．たとえば，学校に通いづらい・通わない子どもたちの中には，なぜ学校に行きたくないのかがわからないまま，その選択を取る（もしくは取らざるをえない）子どもがいる．「何か」によって，心や身体の調子が崩れてしまって，学校には行けないが，「何か」の正体はよくわからない．

「何か」は，「生きづらさ」と呼べるほど生き難さや社会病理と結びついているものではなく，「病い」と呼べるほど特定の症状や能力低下によって引き起こされるものでもない．モヤモヤとした，実体の曖昧な心身の不調である「何か」を呼ぶ言葉は見つからなかった．そこで，私はそれを「しんどさ」と呼ぶことにした．

「しんどさ」は実体が曖昧であるため，自分でもよくわからないうえに，他者にも説明ができず，言語化できないため，不可視化されてしまう．しかし，確かに存在する．存在するにもかかわらず，どうにかする方法もわからず，私は自分自身で「しんどさ」と付き合っていくしかなかった．このような「生活者」としてのもがきの中で「しんどさ」は，私の取り組むべきコア・テーマとなったのだった．

３　生活者から実践者へ

３．１　「もがき」が実践へと育つ

「しんどさ」というコア・テーマに取り組むために，まずは，「しんどさ」という存在を他者に知ってもらう必要があった．とはいえ，「しんどさ」を他者に表明するために適切な既存の言葉はなかったので，私は自分で言葉を作りだしてしまうことにした．たとえば，体調が優れないとき，身体的にも精神的にも自分らしく振舞えずに，家に引きこもってしまう状態になることを「森へお帰り属性」と表現した．傷ついて森の深い所へ帰っていく獣に自分をなぞらえたのだった．

この表現を友人に話し，共感を得られたことから，友人と協働してワークショップを企画することになった．個人的な「もがき」として始めた表現活動が，実践へと展開したの

だった．ワークショップは「困りごと」や「しんどさ」を絵とオノマトペで表現してみる，という内容で，のちに「きもち翻訳」と名づけられた．

また，私は「しんどさ」を自分の中に抱えきれないときに，よく音楽を聴いたり，楽器を演奏したり，歌を歌ったりしていた．自分の気持ちを写し取ったような歌詞やメロディの曲を聴いたり，演奏したりすると，「しんどさ」が身体の中から溢れだして，少しだけ楽になるような気がした．同時に，アーティストが私と同じような気持ちで曲を作ったり演奏したりしていると思うと，独りではないように感じられた．音楽は私なりの「しんどさ」のやり過ごし方だった．

とあるコミュニティカフェで，学校に通いづらい・通わない子どもとその保護者が集まる場がひらかれたとき，私はボランティアスタッフとして，ギターを持ってその場に佇んでいた．「しんどさ」のある場には，音楽があってほしいと思ったし，子どもたちとつながりを持つために身一つというのは心細かった．子どもたちに求められたわけではなく，なんとなく曲を演奏した瞬間，場が混ざり合った感覚があった．そして，おずおずと子どもたちから好きな曲のリクエストがあり，気づけば子どもたちの爆発的な歌声が響き渡っていた．この瞬間を生みだしつづけたいと思い，演奏会と即興セッション交流会（伴奏付きのカラオケのようなもの）をセットにした「みんなとつむぐ音楽会」の実践を始めることにした．この実践もまた，個人的な「もがき」が実践へとつながったものである．

３．２　実践活動の紹介

３．２．１　ワークショップ「きもち翻訳」

「きもち翻訳」は，ざっくりと言えば，「しんどさ」を絵とオノマトペで表現し，対話を通して，それらの表現から自分の気持ちを読み解いていくワークショップである．

アーティスト・コレクティブ「ザ・フー」[2)]との協働で，「しんどさ」をオノマトペで表現してステッカーにするという内容のプロトタイプが制作された．その後，トライアルを重ね，現在の絵とオノマトペで表現するスタイルが確立された．

対話においては，哲学対話[3)]やオープンダイアローグ[5]の手法を参考にし，安心と安全を感じながら，対話を楽しめるように工夫している．対話のファシリテーターは，哲学対話の手法を学んだ経験のある私自身が務めることにした．具体的な手順は下記のとおりである．また，**図１**はワークショップを通して表現された絵とオノマトペの例である．

①ワークショップネーム（参加者の名前）を決める．
②ワークショップの流れ・対話のルールを説明する．
③「しんどさ」（「心のモヤモヤ」[5)]）を色・形で描画する．
　※パステルや色鉛筆などの画材を使用．
④描画についてファシリテーターと対話をし，「しんどさ」を読み解いていく．

⑤描画をヒントに，オリジナルオノマトペを創作する．
※ひらがな・カタカナの五十音表を活用．
⑥オノマトペについてファシリテーターと対話をし，「しんどさ」を読み解いていく．
⑦「お薬の１文字」をオノマトペに付け足す．
⑧「お薬の１文字」についてファシリテーターと対話する．
⑨ワークショップ全体を振り返り，キャプションを書く．

実施時間は 30～120 分で，基本的には 60 分の時間を設けつつ，参加者の希望に合わせて調節する．参加者が短時間での実施を希望した場合，手順⑦～⑧の行程は省略することもある．

（南 2025: 21）

これまで，私の活動拠点である神奈川県と大阪府で全 12 回開催しており，参加者数は 36 名であった．3 歳くらいの子どもから 80 代の方まで幅広い年代が参加した．**図２**はワークショップ内で表現をしている様子で，**図３**は参加者とファシリテーターの様子である．

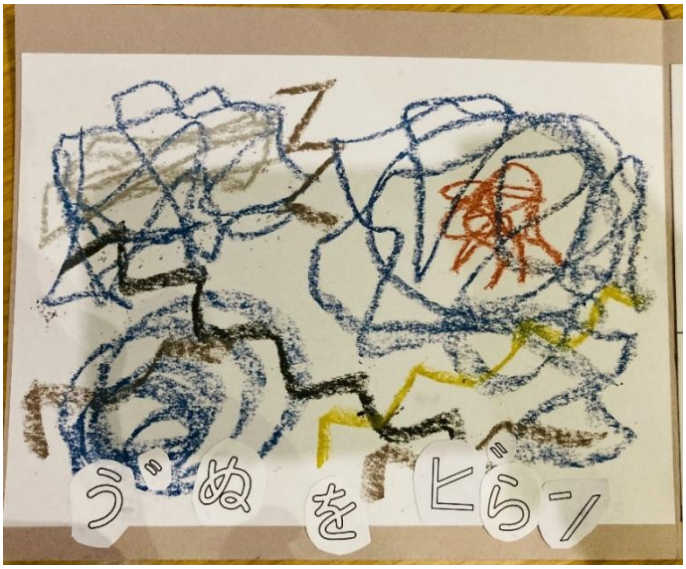

図１　「きもち翻訳」で表現された絵とオノマトペ

図２　表現の様子

図３　参加者とファシリテーター

３．２．２　みんなとつむぐ音楽会（通称つむおと）

「みんなとつむぐ音楽会」は通称「つむおと」と呼ばれているため，本稿でも「つむおと」と呼ぶ.

「つむおと」は 2 部構成で，前半は若者や地域の人びとによる生演奏ライブ，後半は演奏者と参加者が混ざり合って，即興セッションをする交流会である．即興セッションと言っても，ジャズのセッションのようなハードルの高いものではなく，リクエスト曲を演奏者の伴奏付きでみんなで歌ったり演奏したりする気軽なものである．**図４**は 2025 年 1 月につむおと開催したときの様子である.

図４　つむおとの様子

「つむおと」のこれまでの歩みを振り返りたい．先述したコミュニティカフェでの音楽を通した子どもたちとの関わりあいをきっかけに，2022 年に初めて「つむおと」は企画・開催された．2023 年からは，友人やボランティアの力を借りながら，本格的に活動を進めていった．さらに，「つむおと」の実践を継続し，研究の俎上にも乗せるために，日本生活学会と株式会社 academist の共同企画である「知の無尽講をつくろうプロジェクト」というクラウドファンディングに挑戦した．最終支援額は 671,800 円，支援者は 89 名という目標をはるかに上回る支援を受けることができた.

2024 年からは活動が本格化し，神奈川県と大阪府で全 6 回開催し，約 135 人の子ども・若者が参加した．さらに，**図５・６**のように，公立小学校からの依頼で，授業の一環として「つむおと」を実施することもあった.

図５　小学校でのつむおと①

図６　小学校でのつむおと②

３．３　「実践」はどのような営みか

３．３．１　「ひらく」営み

「何かを抱える生活者」の営みとは，「もがき」であった．対して，これまで述べてきた「実践者」の営みは，その個人的な「もがき」を他者に「ひらく」ものであった．それは，まるで「住み開き」のような営みである．住み開きとは，その概念を提唱したアサダワタルによると，自宅などの「私」，つまりプライベートな空間の一部を多様な人が集える「公」，つまりパブリックな空間としてひらく活動・スペースのことを指す（アサダ 2012）．私が経験した個人的な「もがき」はプライベートなものであったが，友人やコミュニティカフェの子どもたちからアイデアをもらうことで，ワークショップや音楽会などの多様な人が集えるパブリックな場へと姿を変えた．また，このように活動を他者に「ひらく」過程で，実践は私だけの営みではなく，協働してくれる友人やボランティアと「共にひらく」ものへと育っていった．現在では，活動は私の個人的な実践ではなく，先述した「任意団体 yoriai.」の実践として位置づけられ，他者と共に育む段階へと移行している．

「あいだをただようひと」としての実践活動は，「住み開き」の「住む」部分が重要である．個人的に抱える「しんどさ」とそれに対する「もがき」は，実践活動のきっかけの一つと位置づけることもできるだろう．しかし，「あいだをただようひと」の実践は，そのように個人的な「しんどさ」や「もがき」をきっかけの一つとして切り離すのではなく，それらの中に半身を浸した状態，つまり，住んでいる状態で他者に実践をひらいている．「生活者」としての私と「実践者」としての私は切り離されてはおらず，2 つが混ざった曖昧な立場として，実践の場に佇んでいる．この意識は，実践活動で「支援する／される関係」を確立しない姿勢につながっている．

たとえば，「きもち翻訳」では，ワークショップ参加者の「しんどさ」をアセスメントし

たり，取り除いたりする支援者として振る舞うことは決してない．あくまで，私にも「しんどさ」がどのようなものなのかわからない，という前提で，参加者から生まれた表現を，参加者と共に楽しみ，味わい，探索する「共同翻訳者」の立場を取っている．「つむおと」では，私自身が音楽を演奏したり，時には失敗したりしながら，来場者を巻き込むかかわりをする．治療的な視座は持ち込まず，支援するわけでもない．

このような姿勢を重要視しているのは，「生活者」としての私が，「しんどさ」をどうにかしようとされることに敏感だからだ．私の「しんどさ」をどうにかしようとする人たちは，どうにかできなかったときに，それを認めず撤退するだけであり，この苦い経験によって私の敏感さは育まれてしまった．当時の私には，「しんどさ」をどうにもできないけれども，ただ側にいてくれる人たちが大きな支えとなった．とはいえ，ただ側にいてくれる人たちと出会い，ゆるやかにつながりつづけることは容易ではなかったように思う．もし，撤退してしまった支援者たちが，ゆるやかなつながりを結べる場や団体と連携して，私の行く先を導いてくれていたら，私は綱渡り的ではなく，安心してそのような場で側にいてくれる人と出会い，自分を癒やすことができたかもしれない．

作家で，「アディクション」[6]を経験した赤坂真理は，死にたい気持ちのある友人の側にいる在り方として，「コントロールに敏感な人にコントロールなど効かないことを知りながら，究極的に無力なヘルプ役としてわたしはそこにいる」（赤坂 2024: 225）と述べている．赤坂と同様に，私は，「しんどさ」をどうにかしようとされることに敏感さを持っているかもしれない人に対して，「生活者」として出会い，「しんどさ」をどうにもできないかもしれないという無力感を持ちながらも，共にいる場を「ひらく」．これが「住み開き」的な「あいだをただようひと」の実践である．

さらに，「支援する／される関係」に投げ込まれるとき，私は，互いの存在を「おずおずと」確認し，関係を調整する隙間がなく，硬直した関係性へと埋め込まれてしまう感覚に陥った．「生活者」同士として，互いの持つテンポで，存在を知り合い，関係を結ぶことができるような場をつくるためにも，私は「生活者」と「実践者」を織り交ぜながら場に存在している．

３．３．２　表現する営み

では，ただ一緒にいるだけではなく，なぜ活動の中に「表現」という行為があるのだろうか．理由は主に 2 つある．

1 つ目は，関わる人たちと「向き合う関係」ではなく，「共にまなざす関係」を築くためである．西井開は，「非モテ」[7]の男性たちが，ボランティアや趣味などを共有するコミュニティに参加することで，苦悩が和らいでいく様子を描いている．それらのコミュニティの特徴を，西井は「同じもの（語りや活動）にまなざしを向けるコミュニティ」（西井 2021: 115）とし，男性集団における閉塞的な「まなざしを向け合う」（西井 2021: 115）コミュニティと比較する．「同じものにまなざしを向ける」とは，神田橋條治の述べる，二者間で共

通のものについて対話する「三角形の対話」（神田橋 2009: 25）とも重なる在り方である．「表現」という同じものを囲み，それをまなざしながら関係を結ぶことで，互いに向きあう閉塞的な関係ではなく，ゆるやかな関係を築くことを目指している．

2 つ目の理由は，非言語的な表現に注目しているからである．「しんどさ」は言語化しづらいために，不可視化されてしまうことは先に述べた．言語化しづらい「しんどさ」を，非言語的な表現であれば他者に伝えられるのではないか，という問いのもと，音楽や絵，オノマトペなどの表現を軸にした活動をしている．実際に「きもち翻訳」では，自分の気持ちがわからないまま絵として表現してみることで，言語化しづらい「しんどさ」を他者と共有できた例がある．「しんどさ」だけでなく，自分の気持ちをうまく言葉にできない人にとって，非言語的な表現は，他者とつながるためのツールとなり得る．以上の 2 つの理由から，表現を軸にした活動をしている．

４　あいだをただよう研究

４．１　「描く」ための研究

ここまで，「生活者」，「実践者」としての葛藤や活動，2 つの立場の連関を紹介してきた．最後の立場である「研究者」としての活動に触れたい．そもそも，なぜ研究という要素が必要なのだろうか．

私は実践を通して，「生活者」としての自身が抱えてきた「しんどさ」を他者と共有し，ゆるやかな関係性の中でやり過ごしていったが，コア・テーマである「しんどさ」が何であるかは，わからないままだった．「しんどさ」は個別的なものであるため，全容がわかることはないだろう．しかし，わからないまま社会で不可視化されていることは問題だ．不可視化されたままでは，「しんどさ」の問題を他者と共有し，議論の俎上に挙げることはできない．また，「しんどさ」を抱える「生活者」としては，抱えているものが不可視化されること自体に痛みがある．「しんどさ」がないものにされてしまえば，日々の葛藤も，それを抱える自分自身もないものにされてしまう．社会から周縁化されているように感じる痛みがあるのだ．

この不可視化の問題や痛みに取り組むうえで必要なのが，「研究」という営みであると考えている．研究の役割の一つとして，不可視化されてきた存在を「描く」ことが挙げられる．私が専攻した医療人類学の分野では，あらゆる文化の医療・ケア，苦悩・病いやそれを抱える人びとを丹念に描くことで，その存在を伝えてきた．他の領域でも，研究対象を描くことは，研究の意義の一つとして挙げられるだろう．先人たちが，研究において不可視化されてきた存在を描いてきたように，私も「しんどさ」を描き，その存在やそれを抱える人びとを描きたいと思った．

４．２　あいだをただよう研究実践例――修士論文での取り組み

修士課程に入り，いざ研究に取り組むことになったが，私はどうしても「生活者」と「実践者」の自分を切り離すことはできなかった．当時は生活の中の「しんどさ」が大きく，「生活者」の自分を切り離して「描く」営みをすることができなかった．自分と地続きである切実さが，研究におけるモチベーションの大部分を占めていたし，自分の「しんどさ」を含む揺らぎを書いてこそ，誠実な「描く」営みができると考えていた．

これほど，「生活者」としての自分が大きいのであれば，それを研究の中心に据えてオートエスノグラフィー[8]を書くという選択肢もあった．しかし，私は「生活者」としての自分にのみフォーカスして研究を進めることはできなかった．先行研究を読んでいるとき，自分の「しんどさ」と文献の内容が共鳴してしまい，読み進められなくなったことがあった．オートエスノグラフィーを書き進める途中で，トラウマに侵襲されてしまい，体調を崩してしまうこともあった．

このような壁を打開してくれたのは，「実践者」としての立場だった．実践を通して，「生活者」の自分が持っている感覚を尊重し活かしながらも，他者と接することができた．実践で触れた，他者の「しんどさ」やそのやり過ごし方は，自分の「しんどさ」にどっぷり浸かっていた私の孤独や苦しさを和らげてくれた．

３つの立場を切り離すことも，フォーカスすることもできなかった私は，「生活者」・「実践者」・「研究者」としての立場を往来しながら「多元的オートエスノグラフィー」を描くことにした．土元哲平，サトウタツヤは，**図７**のようにオートエスノグラフィーの方法論

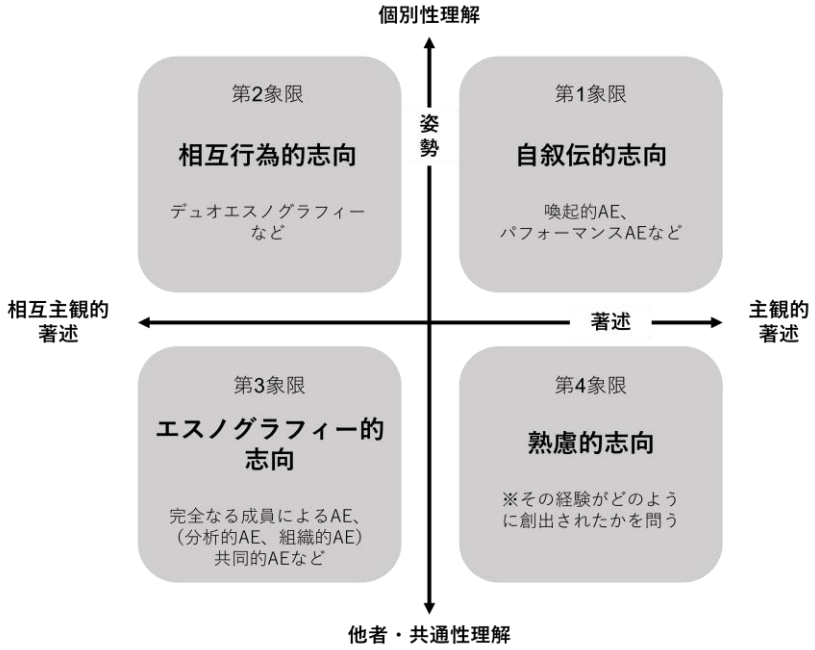

図７　オートエスノグラフィーの方法論的志向に関する４象限マトリクス
（土元・サトウ（2022：78）より筆者作成）

を 4 つに分類している（土元・サトウ 2022）．描く対象の個別性の理解を目指し，エッセイなど主観的な記述をするのが「自叙伝的オートエスノグラフィー」．同じく個別性の理解を目指すも，対話などを通して他者との相互主観的な記述をするのが，「相互行為的オートエスノグラフィー」．自分以外の他者を含む人びととの共通性理解を目指し，相互主観的な記述をするのが「エスノグラフィー的オートエスノグラフィー」．共通性理解を目指し，主観的な記述をするのが「熟慮的オートエスノグラフィー」である．

私は，この中でも 3 種類のオートエスノグラフィーを組み合わせて，研究を進めた．3 つの立場と 3 つのオートエスノグラフィーを関連づけて説明したい．

まずは，自分の「しんどさ」をエッセイ的な記述で描いた「自叙伝的オートエスノグラフィー」である．医療的なケアの場で，「しんどさ」を不可視化されてきた「生活者」としての経験を記述し，その経験における痛みと問題点について論じた．

次に，ワークショップ「きもち翻訳」の参加者が抱える「しんどさ」を，「実践者」として参加者と接しながら描いた「相互行為的オートエスノグラフィー」である．ワークショップの実践自体が，他者と共に「しんどさ」を探索し，描いていくオートエスノグラフィーであると解釈した．ワークショップを通して，他者の「しんどさ」に触れることで，その多様な在り方を描くことができた．

最後は，「しんどさ」そのもの，および，「しんどさ」を抱える人びとの共通理解を目指し，私の揺らぎも含んだ主観的な記述をした「熟慮的オートエスノグラフィー」である．修士論文全体を「熟慮的オートエスノグラフィー」と捉え，「しんどさ」を描いた．ここでは，「自叙伝的オートエスノグラフィー」で描いた自分の「しんどさ」と「相互行為的オートエスノグラフィー」で描いた他者の多様な「しんどさ」を接合し，会話分析も援用しながら「しんどさ」およびそれを抱える人びとの理解とケアの在り方を模索した．

3 つのオートエスノグラフィーを通した，「描く」という営みを，宮地尚子が提唱した「トラウマの環状島モデル」に沿って捉えてみたい．**図８**のとおり，宮地はトラウマの経験を語るという行為をドーナツ型の環状島になぞらえて解釈している（宮地 2018）．トラウマに被傷したばかりの当事者は，環状島の内海の深いところに沈んでいて，声を挙げることができない．しかし，トラウマと距離を取り，他者とつながることで，段々とトラウマについて語ることができるようになる．その様子は，環状島の尾根までの道を登っている様子に喩えられている．トラウマについて発信している人は，尾根の上に立っていると言える．環

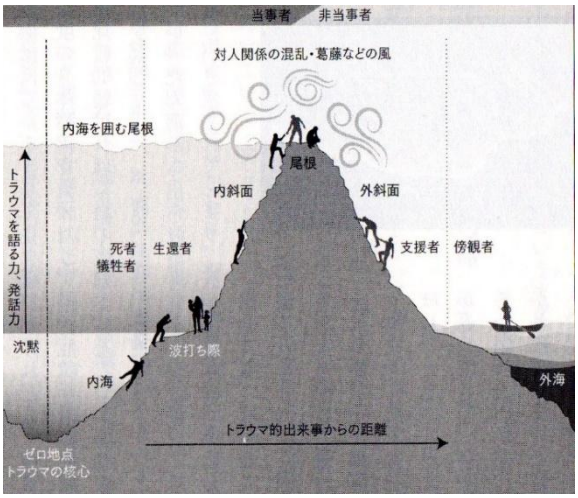

図８　トラウマの環状島モデル
（宮地 2021: 18）

状島の外部には，支援者や傍観者などがいる．

私は，「自叙伝的オートエスノグラフィー」を通して，内海に潜り，「しんどさ」に近づいていった．ワークショップである「相互行為的オートエスノグラフィー」では，他者とつながり，尾根までの道を登った．そして，修士論文として「熟慮的オートエスノグラフィー」を発信することで，尾根の上に立ち，「しんどさ」を社会へとひらいていった．「生活者」「実践者」「研究者」のあいだをただよいながら，進めていった修士論文は，環状島における内海から尾根までの冒険譚であった．

５　今後の展望――「あいだをただようひと」の responsibility

修士論文の執筆を経て，私の 3 つの立場は変化した．「内海から尾根までの冒険譚」を通して，私の「生活者」としての「しんどさ」は少し和らいだ．今振り返れば，修士論文は，自身の救済が大きな目的だったように感じる．抱える「しんどさ」のやり場がなく，不可視化の痛みを抱えていた私は，研究を通して「しんどさ」を描くことで，救われたいと思っていたのだろう．その過程で，「生活者」としての感覚を活かしながら，「実践者」としての活動を展開し，「しんどさ」を他者と共有し，癒やしを得た．「研究」においては，修士論文は大々的に公開はされないが，主査，副査の先生方や研究協力者，学会発表時の聴衆など，描いたものの受け取り手はいた．描き，それが受け取られることで，不可視化の痛みは癒やされ，加えて，「しんどさ」に共に取り組む仲間が増えたように思えた．

癒やされたからといって，完全に「何かを抱えた生活者」としての私が消えるわけではないし，消してはいけないだろう．実践をするときも，研究をするときも，関わる人との関係性に潜む権力構造や暴力性を自覚し，自分を省みるために，「何かを抱えた生活者」としての視点を常に持ち続ける必要がある．しかし，その存在感は前よりも小さく，「実践者」と「研究者」の自分を見守っているような存在に変化している．

3 つの立場のバランスは変わっても，それらを往来しながら活動するという姿勢は変わらない．今後も「あいだをただようひと」として活動するうえで，その responsibility について整理しておきたい．あえて responsibility と表記しているのは，一般的な訳語にあたる「責任」や「義務」ではなく，「response-ability」，つまり「呼応できる力」という意味のほうが，活動の方向性に合っているように感じるからだ．赤坂真理は，現代社会に必要なのは，自己責任論などと結びつけられる「責任」ではなく，「response-ability」，「呼応できる力，対応できる力」だという（赤坂 2024: 193）．社会のしこりや問題に対して，背負ったり，縛りつけたりする「責任」ではなく，人間が持っている「呼応できる力」を活かして反応していく responsibility．それを重んじることは，私たちただの「生活者」が「呼応できる力」を持っており，社会に対して行動できると信じることでもある．私の「あいだをただよう」活動は，実践も研究も草の根的で，その影響力は小さなものであるが，そこには「あいだをただようひと」なりの responsibility があり，それを活かして「しんどさ」やそ

れを抱える人びとに反応することで，少しずつ社会が変容していく可能性を信じている．

では，「あいだをただようひと」の responsibility とはどのようなものだろうか．それは「存在の認定」（緒方・辻 2020: 309）を丁寧にしていく姿勢だと考える．「存在の認定」とは，水俣病患者認定運動に取り組みながらも，認定の申請を取りやめ，「チッソは私であった」と語った緒方正人の言葉である．緒方は以下のように述べる．

> 物であろうが人であろうが，存在が求めているのは，結局，その存在が認められるということだと思う．（緒方・辻 2020: 309）

緒方は，毒も人も「存在の認定」を求めていることに気づいた．本当に求めているのは，「水俣病の認定」ではなく，「存在の認定」であった．緒方は毒の存在を認め，毒も緒方の存在を認め，相互的に「存在を認定しあう」ことで，前へ進むことができるようになった．

「しんどさ」や，それを抱える人びとは不可視化されやすい，ということは何度も述べてきた．水俣病患者だと認定されず，不可視化されてきた緒方と，人間によって生み出されたにもかかわらず，その罪や存在を脇に追いやられてきた毒が，相互に存在を認定しあうことで，関係を結びなおしたように，「しんどさ」も存在を認定され，それを抱える人も存在を認定されることで，関係を結び直すことができる．そして，関係の結び直しによって，「しんどさ」を受けとめ，やり過ごすというような，生き延びるための「もがき」が始まる．

「あいだをただようひと」の活動は，このような「存在の認定」をしているとも言い換えられる．実践活動においては，「表現」が軸に置かれている．「きもち翻訳」には絵やオノマトペ，対話という表現が，「つむおと」には音楽という表現がある．これらの表現は，「存在の認定」のための営みだともいえる．表現は，人それぞれの存在から漏れ出すものであり，存在を表すものである．その表現を受けとめる他者がいることで，表現をしている人間は，自身の存在が認定されたと感じられるのではないだろうか．そのような仮定のもと，多様な表現を受けとめあう場である「きもち翻訳」や「つむおと」を実践している．実際に，参加者から「受け止められた感覚」や「存在を肯定してもらえた感覚」があったと感想を寄せてもらうこともあり，多様な他者同士が「存在の認定」をしあう場になりつつあるのかもしれないと感じている．

研究における「描く」営みもまた，「存在の認定」をする営みだと捉えられる．光の当てられてこなかった存在を描くことで，他者からその存在が認定されるための入口を作るのが，「描く」ということである．

とはいえ，実践においても，研究においても，一方的な暴力性を帯びた「存在の認定」にならないよう，参加者や研究協力者への丁寧な関わりが必要である．そのような関わり方の下支えをしてくれるのが，「生活者」としての自分である．私は，実践や研究を通して

他者の「存在の認定」がされる場に居合わせているが，同時に「生活者」としての自分はどのように他者から「存在を認定」，つまり，受けとめられているのか，感じようとすることで，一方的ではなく，相互的な「存在の認定」をしあうことができると考えている．実践や研究ができるということは，私自身も「そこに在っていい」と存在の認定をしてもらっているということである．その感覚を忘れないことで，相互的な「存在の認定」が成り立つ．相互的な「存在の認定」は，「３．３．１『ひらく』営み」で論じた，「互いの存在を『おずおずと』確認し，関係を調整する」在り方であるともいえる．

「あいだをただよう」という在り方は，ともすれば，どの立場においても中途半端であると指摘を受けてしまうかもしれない．しかし，「あいだをただようひと」としての responsibility を活かしながら活動することで，存在を認められていないと感じている「しんどさ」を抱える人に少しでも反応はできるかもしれない．反応することで，「『しんどさ」を抱えるあなたもわたしも，ここに在っていい」というメッセージを伝えあえる．そう信じて，私は今後も「あいだをただようひと」として活動を続けていく．

６　おわりに

これまでの「あいだをただようひと」としての活動は，「もがき，ひらき，えがく」営みであった．私は「何かを抱える生活者」としてもがき，それを「実践者」として他者にひらき，「研究者」として「しんどさ」やそれを抱える人びとを描いていた．それは「生活者」から「研究者」へと移行するというような段階的な歩みではなく，3 つの立場をあえて切り離さず，全てに身を浸しながら往来する歩みだった．

特に研究においては，「多元的オートエスノグラフィー」という手法を採ることで，立場を往来しつづけることができた．しかし，本論で述べたとおり，私の 3 つの立場は修士論文の執筆を経て，それぞれの重みが変化しており，研究の仕方も変える必要がある．自身の救済を目的としない今，どのような研究ができ，するべきなのかは模索中である．したがって，現状では「あいだをただようひと」の研究とはこれである，と言い切れないし，今後も完全に定着することはないだろう．むしろ，「あいだをただようひと」としては，決めないほうがいいのかもしれない．

そのようにわからないまま進む「あいだをただようひと」としての活動ではあるが，本稿を通して，その responsibility はある程度明らかになった．「存在の認定」をしあうという responsibility は，どのような姿勢で他者とつながりあい，他者を描くのか，わからなくなったときに立ち返る拠り所である．また，本当にあいだをただよっていていいのだろうか，自分は中途半端なのではないだろうかと揺らいだときにも，自分なりの responsibility を思い出すことは，「あいだをただようひと」として在る自分を肯定してくれるだろう．

「しんどさ」に苦しんでいた私は，自分の意志とは関係なく，生き延びるためには，あいだをただようしかなかったのだと思う．今，あえてその在り方を肯定し，「あいだをただようひと」として歩み始めたことで，仕方なく選んでいた在り方は，面白みのある活動として捉え直すことができた．それが中途半端でも，評価されなくても，生き延びるためにそうするしかないのであれば，面白いほうがよい．面白がりながら，私はこれからも「あいだをただようひと」として生きていく．そんなただよいながら生きていく在り方を表現したロゴを**図９**に示して，本論考の終わりとしたい．

図９　「あいだをただようひと」のロゴ

謝辞

私が「あいだをただようひと」として生きられるのは，周囲の理解と支えがあるからです．活動を理解してくれている家族や共に活動を創り上げてくれている仲間たち，応援してくださるサポーターの皆さま，場に参加してくださる全ての方に感謝申し上げます．また，「あいだをただようひと」として研究を進められたのは，その在り方を理解してくださった指導教員の余語琢磨先生の応援があってこそです．心より感謝いたします．今回の執筆を通して，改めて「あいだをただようひと」の活動を省みることができました．この機会をくださった樫田美雄先生にもお礼申し上げます．

注

1) 任意団体 yoriai.は表現の場づくりをする実践・研究グループである．コンセプトは「表現を通してわたしたちを受けとめあう」．詳細は左記公式ページを参照されたい．https://yoriai-official.studio.site/（最終閲覧日：2025 年 3 月 15 日）
2) 「ザ・フー」は，Mega，Mio，Miyu の 3 人からなるアーティスト・コレクティブ．グッズや zine の製作を通して「Everyone is different in wonderful ways（みんな違ってみんないい）」というメッセージを発信している．https://www.instagram.com/the_f_u_u/（最終閲覧日：2025 年 3 月 15 日）
3) 哲学対話とは，「答えがすぐには見つからない謎（問い）を一緒に対話することによって考えていく方法」（特定非営利活動法人こども哲学おとな哲学アーダコーダ 2019: 10）である．複数人で輪になって，対話をしながら問いを深掘りしていく．
4) オープンダイアローグとは，フィンランドで実践されている精神疾患患者の地域包括ケアである．具体的には，患者，家族，医療・福祉の専門職従事者が集まり，オープンに対話をする「ミーティング」を開く．

5) ワークショップ参加者が理解しやすいように，「しんどさ」を「心のモヤモヤ」という言葉を使って説明することもあった．
6) 赤坂真理は，アディクションについて，下記のように述べている．「生きづらさを，さとられずになんとか自分でコントロールしようとして，コントロール手段にコントロールされてしまう．これこそがアディクションだ」（赤坂 2024: 195）．つまり，アディクションとは，特定の物質や行為に依存することだけを指すのではなく，あらゆるコントロール手段への囚われを指している．赤坂はそのような広義の意味でのアディクションの経験者である．
7) 西井開は「非モテ」とは，「恋人がいない状態を指し示す言葉から，特定の特徴を持つ男性を指すラベリングの言葉として意味が広がってきた」（西井 2021: 20）としつつ，「「非モテ」という問題はただ表層として現れただけであって，その奥深くには，男性をめぐるさまざまな問題系が潜んでいるのではないか」（西井 2021: 24）と主張する．
8) オートエスノグラフィーとは，藤田結子，北村文によると，「わたし」の感情を出発点として，エスノグラフィーを記述し，その過程で文化的・社会的文脈の理解を深めることを目指す記述方法である（藤田・北村 2013）．

引用文献

赤坂真理，2024，『安全に狂う方法――アディクションから掴みとったこと』医学書院．
アサダワタル，2012，『住み開き――家から始めるコミュニティ』筑摩書房．
藤田結子・北村文，2013，「オートエスノグラフィー」藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー　新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社，104-11．
神田橋條治，2009，『対話精神療法の初心者への手引き 再版』山王出版．
中西正司・上野千鶴子，2003，『当事者主権』岩波書店．
西井開，2021，『「非モテ」からはじめる男性学』集英社新書．
南摩周，2025，「「言語化しづらい『しんどさ』」の表現に対する翻訳的理解――描画とオノマトペを用いた表現ワークショップの実践を通して」『アートミーツケア学会オンラインジャーナル』 (16): 16-32.（https://artmeetscare.org/wp-content/uploads/2025/03/M.Minami_vol16_16-32.pdf，2025 年 5 月 11 日取得）
宮地尚子，2018，『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房．
宮地尚子，2021，『環状島へようこそ――トラウマのポリフォニー』日本評論社．
緒方正人著・辻信一 著編著，2020，『常世の舟を漕ぎて 熟成版』株式会社素敬．
土元哲平・サトウタツヤ，2022，「オートエスノグラフィーの方法論とその類型化」『対人援助学研究』12: 72-89．
特定非営利活動法人こども哲学おとな哲学アーダコーダ，2019，『こども哲学ハンドブック――自由に考え，自由に話す場のつくり方』アルパカ．

＊＊

【編集後記】『現象と秩序』第 22 号をお届けします．今回も充実の 9mm 背表紙です．

第 1 論文は，ろう者の合理的配慮に関する考察であると同時に，多様な人生経歴を歩んできたろう者にかんするライフストーリー研究でもあります．「バケツ事件」，「手話サークル」等々の「小見出し」を見て下さい．それだけでも，筆者のインタビューが相互信頼に基づく充実したものであったことがわかると思います．味読すべき内容が書かれています．

第 2 論文は，日本人が羊羹（色）とどのような「ヒト−モノ−概念関係」を歴史文化的に取り結んで来たのかということに関するコーパス研究です．「羊羹色」はくすんでいることに意味があり，その結果「羊羹色」という色表現は「羊羹色に黄ばんで」と時間の経過をも含んで用いられています．本論文は文化研究の可能性を拡げる論文であるといえるでしょう．

第 3 論文は，是非オンライン版をカラーでご覧になってください．「きもち翻訳」がどんな風に「オノマトペ」を利用しているのか，「つむおと（みんなとつむぐ音楽会）」がお寺をどんな風にリラックスした空間に変えているのか，一目でわかると思います．著者の南摩周さんは，新進気鋭の人類学者であると共に文化領域における実践活動家でもあります．彼女の実践がおもしろそうだ，とお感じになったら，どうぞメール連絡をしてみてください．関東でも関西でも活動していらっしゃいます．

スペースが尽きかけています．あとは，1 行ずつの紹介とします．第 4 論文は，身体変工への嫌悪感という新しい切り口からのイレズミ論です．第 5 論文は，「生成 AI のハルシネーション」に関する実験研究です．第 6 論文は，イギリスの障害児者家族に関するフィールドワーク論文です．いずれも，新時代を切り拓く意欲に満ちた本誌らしい論文ですので，どうぞ，読んでの感想を企画編集室にお寄せ下さい．おまちしております．（Y.K.）

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2024 年度）
編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）
編集委員：樫田美雄（摂南大学），飯田奈美子（立命館大学），加戸友佳子（摂南大学）
編集協力：村中淑子（桃山学院大学）　編集幹事：大江勇輝（京都産業大学）

『現象と秩序』第 22 号　　2025 年　3 月 31 日発行

発行所　〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17-8
摂南大学　現代社会学部　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室
電話・FAX：072-800-5389（樫田研），e-mail：kashida.yoshio@nifty.ne.jp
PRINT ISSN　：2188-9848
ONLINE ISSN　：2188-9856
https://gensho-kashidayoshio.sakuraweb.com/　（←前号から新サイトになりました）

＊＊